

旅行から歸つて

水 野 仙 子

歸つて來ました。と此手紙が旅行先に着いたか着かぬにあなたの手許に届いたなら、定めしその旅行がどんなであつたかほど想像がつきませう。とにかく歸つてまゐりました。兩國に着いたのは日暮方で、さらでも煤けた本所一面の空は濁つた、どんよりとした、まあ今一寸その形容詞が思ひつきません。

袖ヶ浦へ八丁といふその八丁に氣がひかれて、荷物もない鉢とてぶらりと稲毛へ降りてみましたが、こちらの繪ハガキは多分明日の朝あたり着きませう、海邊の茶店の影で鉛筆をなめく書いたので、よ、でもあの端書より私の方が先に早く東京に着いたとすれば、あの文句は面白くないものになつてしまいます。松林のそゞろ歩きだけは稍々心に満ちました。下駄の疊に喰ひ入る砂の續く限り、思ふでもないもの思ひが續いて、誰れの足音もそれを妨げないのを幸ひ、山國育ちの海珍らしさも忘れて、たゞ歩いて歩いて手に觸れ次第の松の樹の皮を撈つて行きました。コートを預けた茶店に戻つて鹽せんべいをたべながらこの濱づたへに何處までも行つたら何處に着くかと聞いたたら、千葉の町はづれまで何里だとかお婆さんがいひましたつけ。

兩國の朝は汽車を待つ間の時間潰しにあなたと二人であの本所のほこりの中を歩いて居ましたのね、あれから四時間あまり三等室の痛い腰掛けに揺られて、夕暮れに早い頃はもう田畑の中の大きな古びた家の

客となつて居ました。それがねえ、思ひがけなかつた譯ではないが妙に拍子抜けがしてしまつたの、何故といつたら私らの仲間は何處にお客に行つても自分から御飯をよそつたり、夫婦者の蒲團の一組みを占領して泊つたりするやうな遠慮なしでせう、おあんなさいといへば炬燵にでもなんでも潜つて無駄話をするやうな風にしつけてましたから、十疊敷の床の間もないがらんとしたお座敷に、焚き落しを盛つた火鉢と座蒲團一枚、お茶をいれて来るつては、お膳を持つて来るつては、ひとり残されてはほんに私のやうながさつ者は拍子抜けがしてしまひます。ぼんやりとして庭の面を眺めると古池の向ふに梅は咲いて居るが御承知の通りのあの花では強い色彩の刺撃を望む目が承知しません。せめて物音をもと思つても時々傾いた門の前を過ぎる男の肩にきしる肥桶の天びんか、それとも一つ村はづれの白壁の家から、カーン／＼と間の抜けた拍子で聞こえて来る鍛冶の音とたゞそれだけ、椽に立つても目を遮ぎる山もない、川もない、樹立もない、私はむしろその單調が恐ろしくなりました。

あなたと話をするやうな底のぬいたこともいひませんし、先方ぢやこちらに一目を置いて對してゐるので、すから、ともすれば黙つてしまつて二人して何かい／＼と苦心します。それがやり切れなく苦しい。一重ね持つて来てくれた雑誌も、女學世界では満足が出来ないではありませんか、おかげで口繪の新郎新婦や令嬢達を澤山知りましたが、あまり美人つて居ないものですね。

さう思つては私は一晩が苦痛でした。智識のないところには居られない、といつたつてあの人達が無學だといふのではないので、だゞ苦しい／＼といひながらもやはり壓へつけられるやうな思想の中に居たいのですね、居なければならなくなつたのですね。刺撃の中毒、複雑の中毒、やはり都會の魔睡にかゝるよ

りほかはありません。

私が着いてから庭を掃かせる、雑巾をかけさせる、菟弱を煮つけたりして頻りにもてなすつもりなのですが、それが却て私には苦痛でね、それもそのもてなしぶりが少し表情的であつて欲しいと思ふ。さればといつて厚化粧の表情はこれまた厭ですが、むづかしい注文だけでも少しいき／＼として欲しいやうな氣がしてどうも飽き足らない。お母さんも姉さんも妹さんも弟さんも、遺傳の病氣でも潜んで居るのかどうか皆顔色が悪いのですもの、たゞ姉さんといふ人の顔だけひどく氣に入りました。廣くて理性的なところがね、普通の女にそれを見るのなら、私同様あまり感心しませんけれど、主人のない家庭に長姉と生れたあの人の顔は尊いと思ひました。筒袖の着物を着て小學校に奉職をして居ります。その妹のわがS子さんはまた至極太平なもので、最も二週間ばかり風邪から寝て居たとのことでしたが、毎日何をしてくらしてらつしやるの？とあまり不思議だから聞いたたら、なんにもしやしないと薄ら笑ひをして居りました。よくもかういふ風にして生きて居られるのねといひたかつたけれど、そんなことをつけ／＼言はれるやうな人だつたなら一日位私も逗留して居ましたでせう。

ばた／＼と廊下に小さな足音がするので小さなお妹さんでもいらしたのかと思つて居ると、襖のかけから遠慮もなくずつとお通りになるのは白い毛のめんどりどの、主人の歿後一匹死に二匹去りして今はこの君寡暮しなそうです。その時何故か微笑まれて廣い座敷にたゞ一人、明朝歸らうと思ひたちました。

芹の香の高い五目ずしの御馳走になつて、さていよく暇を告げやうとすると、どうやら私を停車場まで送らせるやうな取りはからひが襖越しに聞こえるので、私はS子さんに拜むやうに頼んで一人で歸らせ

て貰ひました。橋のたもとにいつまでもく／＼子さんが立つて居る。それが平野だから豆粒ほどになるまでも猶よく見えます。振りかへりく／＼土色の景色の中をかへりながら、もの詫びしいやうな思ひを味はひましたが、併しそれは古い頃の美文などで養はれた情緒なのかもしれない。そんなことを考へながら姿がもう全く見えなくなると、安心して――壓迫から逃れたせい／＼とした氣持ちになつてすたこら道を急ぎました。平野の中の古い廣い原から驛までの一里弱、麥の芽だけが單調なあたりを彩つて居ました。

東京がいく、やつぱり東京がいく、少し東京をはなれてみたいなどと言つて出たくせに私はかうしてただ一日で歸つて來てしまひました。電車に乗るのが一番嬉しい。

たゞ往復八時間の汽車の中が、爲なくつてならないこともなく、義理の感情のと束縛のない心置きのないぼんやりを續けることが出來て、こればかりは旅行の賜だらうと思ひます。さあそんならそこに今度の旅行の價値を置いて筆をとめませう。

郊外の家の夜は更けました。それではさようなら、また近いうちにお目にかゝりませう。さようなら。

——完——

【入力者注】

底本と字数を合せるために、句読点の文字サイズを0.5ポイント小さくした箇所があります。

「だゝ苦しい」「もの詫びしい」は原文のままとしました。

初出・底本：「同人」第壹年第壹號

明治四十四年四月十日発行

入力：小林 徹

公開：令和5(2023)年2月4日

謝辞：底本コピーをご提供下さいました木村雅子様（短歌結社潮音社代表）ならびに

この作品の存在を明らかにして下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。

[「水野仙子作品年譜」](#)へ戻る